

自分も誰かのヒーローになりたい。

NPO法人ヒーローズ設立



新たな一步を踏み出した林敏之氏



同志社大学・神戸製鋼で黄金期を築いた大八木淳史氏(右)と共に

「ラグビーの指導を通して、子供たちに夢や感動を与える」と、特定非営利法人(NPO法人)ヒーローズが設立された。理事長を務めるのは元ラグビー日本代表の林敏之氏。現役時代は、神戸製鋼の日本にも貢献するなど、その戦績には枚挙にいとまがない。

林氏はこれまでにもラグビーを通じて「出会い」「命の大切さ」「勇気」「感動」「感謝」を伝えるために「将来世代育成プロジェクト」「ラグビー寺子屋」を日本全国で開催してきた。今後もシンボジウムやラグビー寺子屋での指導を通して、第2の林敏之の誕生を願う。

「自分も子供時代にラグビー選手と出会い、それが憧れとなり、熱心にラグビーに打ち込むようになつた。汗や涙を流すことの素晴らしさや湧き上がる感動を覚えた。現代は乾いた時代と言われていますが、自分の貴重な実体験をもとに、夢や感動を子供たちにも伝えたい」と設立の経緯について述べた。

3月20日、リツカール

トン大阪で、ヒーローズ設

立祝賀会が開催された。

同志社大学・神戸製鋼の

後輩にあたる大八木淳史

氏、平尾誠二氏の姿も。会

場には林氏の熱意にほだ

されて、会場には立錐の余

地もないほど多くの来場者で

あふれかえった。

林氏はこれまでにもラグビーを通じて「出会い」「命の大切さ」「勇気」「感動」「感謝」を伝えるために「将来世代育成プロジェクト」「ラグビー寺子屋」を日本全国で開催してきた。今後もシンボジウムやラグビー寺子屋での指導を通して、第2の林敏之の誕生を願う。

■お問い合わせ
NPO法人ヒーローズ事務局
☎ 06-6867-4444

神
an essay

戸 再発見

与謝野晶子と阪神地区②

加藤 隆久 (神戸芸術文化会議長)

(生田神社宮司)

昭和十一年五月十三日、丹羽安喜子の歌集『芦屋より』の出版記念会が大阪俱楽部で開催された時に、晶子は表紙絵を描いた画家の石井柏亭と共に列席して、晶子の息子・秀と同夫人のみち子と共に三人で芦屋の丹羽邸に宿泊しています。その時の

自筆の原稿が、私の持っていた竹の文箱の中に残っていました。これを見ますと、晶子と安喜子との出会いいや師弟関係の様子がわかります。それによりますと

『丹羽夫人は十七・八年前から新詩社の社友であつた。併し故人の寛も私も家族同様にお親しくするやうになつたのは、昭和五年この方である。

其の夏私達は講演の為めに紀州の高野山へ出かけた帰りに、東京から同行した近江、辻二夫人をも加えて、関西の社友の方たちと幾日かを継続して歌を詠む企てをもつて居た。以前に御良人俊彦氏が外遊中に一度富士見町の家を夫人が訪ねて下すつた事はあつても、こんな目的があつて逢つたのはこの時が最初で、其れは私の郷里の和泉の濱寺の海岸であつた。翌日は大阪、翌々日からは神戸、

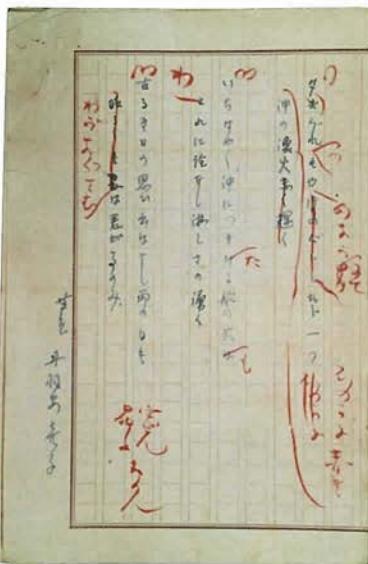
六甲と云ふように場所を変えて、歌会は予定通り連日開かれたのであつた。』

と記していく、「昭和十一年三月十日、遙青書屋にて 与謝野晶子」としたためであります。

資料の中には安喜子さんの歌稿がたくさんあります。一首一首に与謝野晶子としたためであります。

これら歌稿に記された年月日を見ますと、一番古いものが大正九年十二月、次いで昭和五年九月五日、それから昭和七年十二月十四日、昭和八年

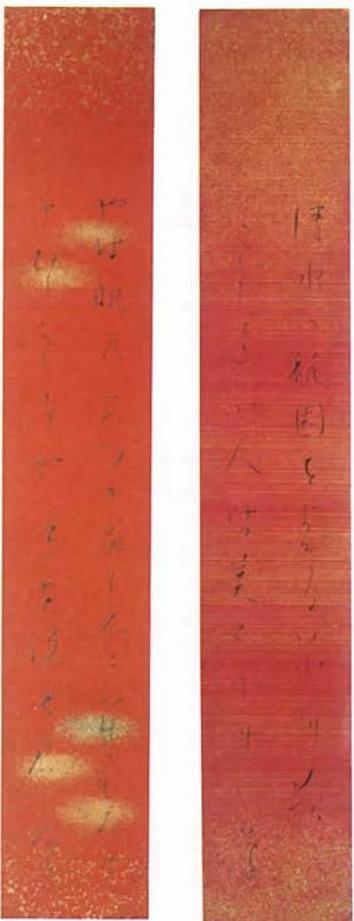
十一月末日、昭和八年十二月十六日、昭和九年二月十三日夜、昭和十年四月十日、昭和十年十月二十八日、昭和十三年十二月二十四日とあります。最後が昭和十五年一月「有馬で療養中のうた」で終わっています。歌稿の添削の始まりが大正九年ですが、晶子と安喜子は昭和十一年に記した『芦屋より』の序文からさかのぼつて十七・八年前といふと、ちょうどその年代になります。はじめは



丹羽安喜子の自筆原稿。与謝野夫妻の朱入れがなされている。(筆者所蔵)

新詩社の社友として歌の添削を請うただの師弟関係で、昭和五年から親しい交際が始まっていたということになります。

晶子の歌の評は実に懇切丁寧で、しかも気配りがあるのには感服せざるを得ません。歌頭の賞点のマルを横に並べて書くのが特徴として、いずれも朱で波のようなマルがやさしくつけられています。晶子は「秀れたる着想」と「常識的なるものの排除」という語句をよく引用しています。この歌稿の評の中にも昭和八年十一月末日付けのものに「御旅中の制作よきお着想多し、常識的着想の減じたるを賀し上げ候。寛、晶子両人にて拝見」と記し、また別のものには「價なき着想は思い切つてお捨て下されたく候。晶子拝見」と記しています。これらは、晶子の短歌の評論にしばしば出てくる歌論の中心をなすものでした。例えば「白き富士群青の裾大室の淡き紅葉と精進湖の水」という歌を「色を並べ候こと初心の人のすること」と厳しく戒めて批評をしています。昭和十一年五月十二日に丹羽安喜子の出版記念会に出席し、丹



与謝野晶子直筆の短冊。
右が「清水へ祇園をよぎる花月夜 こよひ達ふ人皆うつくしき」、左が「やは肌乃あつき血潮に触れも見でさびしからずや道を説く君」の歌。(筆者所蔵)

羽邸に泊まつた晶子は次のような歌を詠んでいます。

上梓の賀ありと我らの来てあへる

蘆屋の邸の初夏の雨

一昨年の津波の後に住みつきし

木の若葉する蘆屋邸かな

この年の二年前に芦屋で大津波があつたのでしよう。

あさましく津波に逢ひし濱の家

朽ちくらべけり不軍の身にも

写真師のうしろに松の花粉散る

五月の雨のいささかのひま

この時の晶子の年譜には「五月京阪神方面へ西下、吟行を続ける。『晚春行』七十九首を『冬相』に発表」とあります。晶子が芦屋へ来ました最後は昭和十五年四月二十二日です。東京から晶子、令息、同夫人と令嬢のほか、歌の友達四人を連れ

て芦屋に来遊しました。六甲・有馬・須磨を丹羽安喜子が案内し、六麓荘の国際ホテルにも行き、芦屋の全景を観光しています。

行春の武庫の蘆屋の沙川に

流るるとなく伏したる水よ

松林がつつじの紅にまみれたる

武庫の辰巳の裾山をゆく



与謝野寛(=鉄幹)の歌碑除幕式。鞍馬寺にて昭和13年5月22日撮影。(写真は筆者所蔵)

松原の柳の添ひて路いたる

蘆屋の濱の防波堤まで

大阪の港の役所山吹の

垣結ぶごとし海の上の灯

春の灯の麗しき夜の二更にて

蛙なくなる山蘆屋かな

これらの歌を詠んで翌日から京都、天橋立など丹羽安喜子が案内して帰京しました。その五日後に脳溢血で倒れて以来、右半身不随で病に伏せることになるのです。従いましてこの芦屋が最後の吟行旅行となりました。昭和十七年一月頃から晶子は病状が悪化し狭心症を伴うようになつて、五月には尿毒症を併発、十八日より意識不明に陥つて二十九日に亡くなるのです。丹羽安喜子はこの

文章の終わりをこのように結んでいます。
『芦屋を御出立の際、先生の歌碑を芦屋に建てたいと思ひますと申し上げたら、「あの松原へ」とほほゑまれ、「そのうちまたよせて頂いて、その様な歌を詠みませうね」と仰せられたが、この時が最後になろふとは、先生も私達も思はなかつたことである。』

いま、与謝野晶子の歌碑が芦屋に建立されていないのが悔やまれるのであります。



■ 加藤隆久(かとうたかひさ)

1934年生まれ。生田神社宮司。神戸芸術文化会議長。神戸女子大学客員教授。文学博士。震災で倒壊した生田神社を「耐震補修」として再建。被災史や地域史の研究、伝統芸能やミュージカルのプロデュースと幅広く活躍。神戸市文化賞、兵庫県文化賞受賞。



中右瑛

ふの字づくしの寄せ絵

「あげまん」お多福のラッキー・カード

絵師・藤よし

お馴染み「ふっくらさん」のお多福。美形ではないが母性愛くすぐる福よかな顔つきは、日本人には幸福を呼ぶ女性として親しまれている。江戸時代には吉兆「あげまん」として浮世絵には数多く登場した。

図はお多福のお神樂面だが、よく見ると、いろいろなものを寄せ集めて、顔が形成されている。

髪の毛は「房」。目、眉毛は「筆先」。鼻は「ふ」の文字。口は「袋」。額には「分銅」（江戸時代の計量器の重し）。「福」に通じる「ふ」の字尽くしだある。

顔の輪郭線は、瓢箪型だ。顔の右側には小さな瓢箪が描かれ、そのなかに画師「藤よし」の落款が書されている。瓢箪は「ふくべ（瓢）」とも読み、落款とともに「ふ」の字づくしとなり、「有掛絵」と呼ばれるラッキー・カード。

「藤よし」という浮世絵師は知られていないが、「藤よし」と落款された戯画やおもちゃ絵、有掛け絵を若干残している。「おもちや絵」の名手・一鵬斎芳藤の弟子という説もあるが、私は、芳藤が「ふ」の字尽くしのために、洒落てペンネーム芳

藤をひっくり返して「ふじよし」と署名したのではないかと推測している。

背景には、次のようなことが記されている。
慶応三（一八六八）年二月七日、卯の刻。金性の人、うけ（有掛）に入る。

すなわち、有掛に入る金性の人とは、

3歳、	17歳、	18歳、	25歳、	26歳、	33歳、
34歳、	47歳、	48歳、	55歳、	56歳、	63歳、
64歳、	77歳、	78歳、	85歳、	86歳、	93歳、
94歳、	107歳、	107歳、	108歳、		

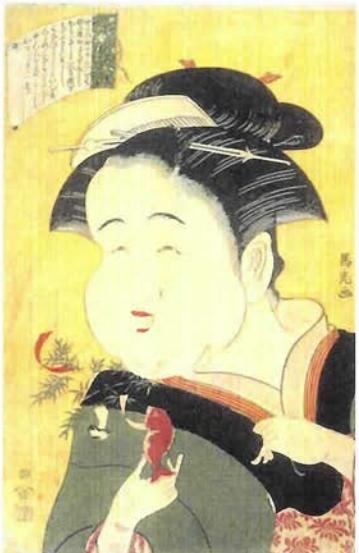
と、大勢いる。

前回掲載の「有掛絵の福助」と同じ趣向である。

お多福は「あげまん」。美形ばかりが女性ではない。子宝に恵まれ、商売繁盛、お金が貯まる。この福よかな顔こそが、日本人の理想の女性という殿方も多い。

「このお多福のラッキー・カードを買えば、貴男は幸福になれる」

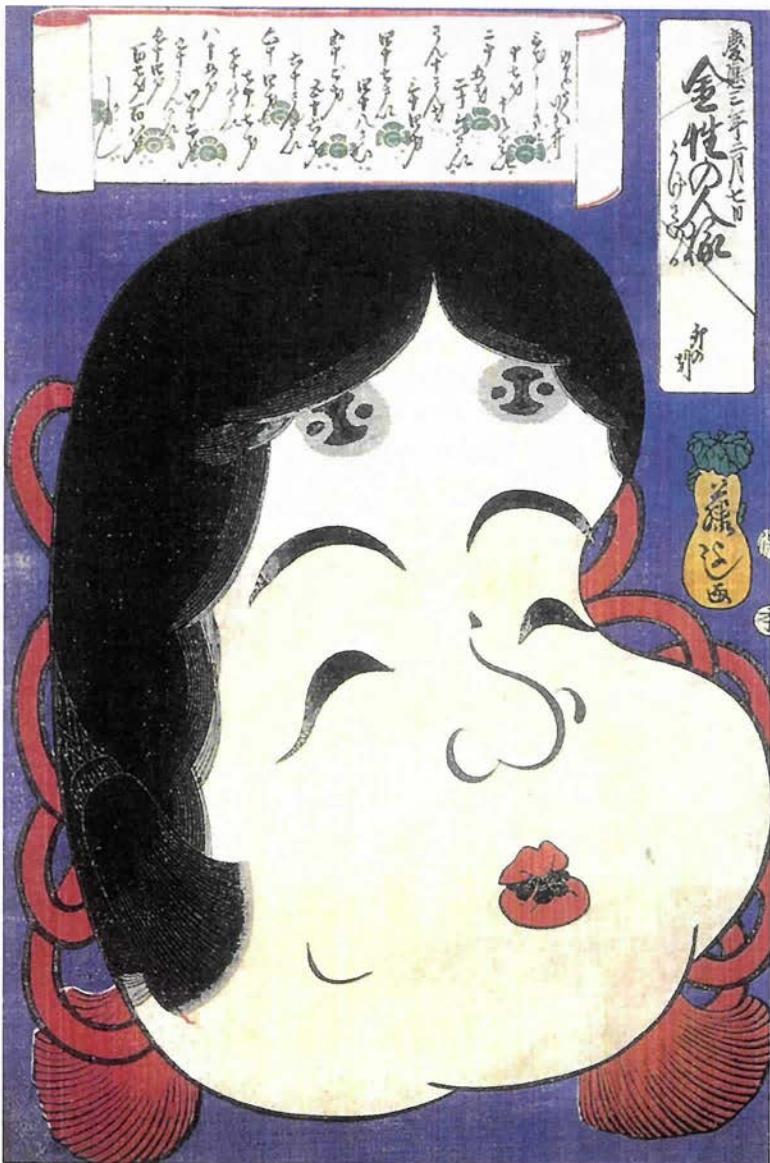
という趣旨もあるのであろう。
独身男はこぞつてこの吉兆ラッキー・カードを買ったに違いない。



ふくよかなお多福は、浮世絵に数多く登場した（絵師・馬光）



■ 中右瑛（なかう・えい）
抽象画家・浮世絵夢エッセイスト。
一九三四年生まれ、神戸市在住。
行動美術展において奨励賞新人賞、会友賞、
行動美術賞受賞。浮世絵内山賞、半どん現代
美術賞、兵庫県文化賞、神戸市文化賞など受
賞。現在、行動美術協会会員、国際浮世絵學
会常任理事。著書多数。



金性の人様うけにいる 藤よし

【兵庫沖縄友愛運動県民の会】

太平洋戦争も末期の沖縄本島決戦時、沖縄県に赴任された神戸二中（現兵庫高校）出身の島田叡（あきら）知事が、わが身を捨てて沖縄県民のために尽くされ県民と運命を共にされた。このことが切っ掛けになって、沖縄の本土復帰の年に両県が兵庫沖縄友愛協定を締結するところとなつた。以来、長きに亘って両県の絆を保ってきたのが兵庫沖縄友愛運動県民の会と神戸泡盛の会である。

文・写真 上川庄一郎

【沖縄友愛訪問の旅を企画】

今回は、その兵庫沖縄友愛協定締結から35周年という節目を迎えたことと、昨年開港した神戸空港の開港一周年を記念して、二つの沖縄友愛訪問の旅が企画された。その一つは、行きは神戸港から那覇港までを『ぱしふいいくびいなす』でクルージング、帰りは那覇から空路神戸空港へ、もう一つは、神戸・沖縄を往復航空便でという企画である。共に那覇市で催す沖縄の皆さんとの交流会に参加することがメインの企画である。両グループ併せておよそ100人が参加することになった。

【神戸港から石垣島へ】

私は、クルーズ組で参加した。横浜からの乗船客が一六八名、神戸からは三三三名、あわせて五〇一名。ほぼ満員の乗船客を乗せて3月11日に神戸港を出航した。このクルーズは、石垣島、宮古島、沖縄本島に寄港することから、沖縄県知事とそれぞれの市長に神戸市長からの親書も携行することとなつた。

神戸から沖縄までは、40時間ほどの航海であるが、石垣島まではさらにひと晩とゆっくり船旅



華やかにテープを切って、今まさに神戸港・ポートターミナルから離岸する（ぱしふいいくびいなす）

で寛いだ。船旅ではいろんなイベントが催されたが、今回のハイライトは、石垣市（鳩間島）出身の鳩間可奈子さんの島唄（八重山民謡）コンサート。沖縄出身の乗客もいて、みんなで一緒に唄つて踊るという盛り上がりぶり。沖縄にやつてきたという実感が湧く。

3月14日朝8時、石垣港に着岸。8時30分、嘉数石垣市観光課長の出迎えで市役所へ。早速市長室に通され、大演長照市長が生憎東京出張中ということで黒島健総務部長と池城安則企画開発部長が対応してくださいました。

兵庫県には石垣出身の方も多く在住されていることもあります。また南西諸島ブームということもあって、7月からは神戸・石垣線の空路も新設される。これを機に従来にも増して両市の交流を深めたいと、神戸市長からの親書を手渡しました。両部長さんは、市長が帰りましたらこのことを良く伝えます。ご訪問ほんとに有り難うございます、と丁重な答礼をいたしました。地元新聞とテレビの取材もあっていささか驚いた。

それにして、今、離島ブームなのだろうか。石垣観光港は、周辺の島々に向けてひつきりなしの船の出入で大賑い。近海航路がなくなつて閑散

としている神戸港・中突堤の“かもめりあ”とは好対照。何とも羨ましい限り。

【オリックスのキャンプ地・宮古島へ】

一夜明けて、次なる訪問地は、宮古島。ここは、亡くなられた仰木監督がこよなく愛されたところでもある。宿舎から球場まで歩いて通われたという道路は、仰木ロードと名付けられ、毎年島の人たちがこの道路を歩く行事が定例化しているのだという。「私も必ず参加しています」とは、伊志嶺亮市長の弁。「毎年10月には、尼崎で宮古島会が催されるので、今年も那覇経由で神戸空港を利用して行くことにしています。直行便が関西空港になったのが残念です。何とか神戸に直行便を、と航空会社に申し入れているところです」ということであつた。

私からは、神戸市長の親書を手渡して、「ぜひ、その節には神戸にもお立ち寄りください。市長にも良く伝えます。神戸・宮古島の直行便についても双方で努力いたしましよう」と云つてお暇した。

これから両市とどのような形で交流を深めてゆくか、ゆけばよいのか。地元では、昨年の八重山商工の甲子園出場で盛り上がっている。神戸にも甲子園出場級の高校がいくつもある。石垣線開設を機にこれらの高校間の交流試合などが考えられないものだろ

石垣市役所にて

宮古島市長と

石垣観光港船着場

さかみかわ

しょじょうじゅう

1935年生まれ。

神戸大学卒。神戸市に入り、消防局長を最後に定年退職。その後、関西学院大学、大阪産業大学非常勤講師を経て、現在、フリーライター。

独立して真珠商になることを

決意した田崎俊作はその準備のため
郷里・松原（現在の長崎県大村市）に
戻った

海からの贈り物・真珠とともに生きる

日本の真珠王

King of Pearl ~ Syunsaku Tasaki Story

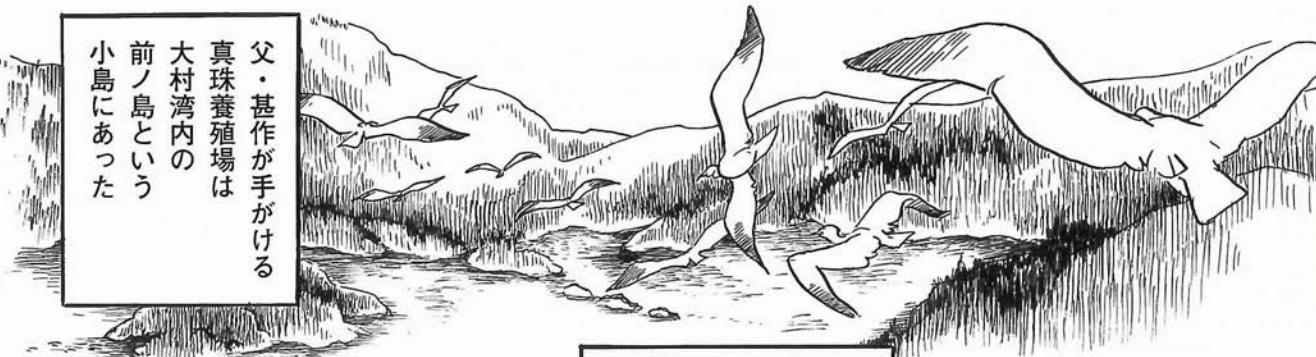
田崎俊作物語

第四話

漫画：佐藤晴美







父・甚作が手がける
真珠養殖場は
大村湾内の
前ノ島という
小島にあつた









